

「地域複合生産システム」と「0円リゾート」 づくりを目指した「みるくたうん」開発構想

——計画策定に携わって——

島 添 美 葉 子

1. なぜ、いま地域活性化か

——現場の立場から——

（船方農場との出会い）

株式会社みるくたうん設立準備室で、情報担当をしております島添美葉子と申します。今日の報告では、今私たちが実際に活動していることの、特に人づくりの部分にテーマを当てて、ここ1年間ぐらいに研究会なんかを通じて行ってきたことを、ご説明できたらと思います。

まず、その前に、自己紹介も兼ねまして、私がどのように船方総合農場と出会ったかということを説明したいと思います。

私は、大学の専攻は工学部でして、有機化学をやっておりました。卒業研究のときに、界面活性剤の合成をやっていたんです。ですから、研究という形で、私はつくる側にいたんですが、そこで、つくる側と使う側の意識のずれに物すごく興味を持ちました。同じ洗剤でも、つくり上げたとき、工場から出てきたときにはまだ化学製品なんですね。それが、スーパーの店頭に並ぶと、日用品と名前を変えてしまう。どこが一番違うか。つくる側と使う側は、安全に対する意識が全く違うわけです。そこには、すごく大きな落とし穴があるんじゃないかと思ひまして、その間を埋める何かができないかなとずうっと感じておりました。

卒業しまして、研究室の関係の就職などいろいろあったんですが、どうしてもつくる側に信頼を置き切れませんで、とうとう就職をしませんでした。じゃ、自分がどうい

ころで活動していったらいいだろうかと考えたときに、現状で、つくり手—生産の部分と消費の部分の間に位置していると思ったら、せいぜい市の消費者問題を扱うところとか、県の消費者センターだとか、そういう所ではないだろうかと思いました。防府に帰ってまいりましたときに、防府市の消費者モニター制度というのがありましたので、そこに入れていただきました。その消費者モニターは、いろんな消費活動について、勉強会なんかを開いていく制度なんですけれども、その一番最初の見学会というか、研修が船方総合農場でした。

そこで、船方農場の社長なんかからいろんな話を聞きまして、ああ、ここにも自分が思っていたのと同じような問題があるんだなと思ったんです。農業も、つくっている人たちの考え方と、農産物をスーパーなんかで買う私たちの気持ちとは、随分大きなずれがあるような気がしてならなかったんですね。

そうしているうちに、船方農場の社長の方から、チーズの加工をやっていて、その販売の方の研究会を開くから、ぜひ参加しないかと誘われました。船方農場とのおつき合いはそれからでございます。

船方農場の概況

（船方農場の位置）

船方農場のある位置は、山口県の、ほとんど島根県との県境にあります。ここが今活動の舞台である阿東町で、徳佐盆地というところで

気候は、平均気温が大体13.3度で、積雪もあります。本州最南端の自然のスキー場も

ありまして、山口県の中では山間の高冷地になります。お隣は山陰の小京都と言われる津和野町でして、津和野町と反対側のお隣は県庁所在地の山口市になります。町の中を国道9号線が縦断、315号線が横断しておりまして、JRの山口線のSLも走っております。

山間地なんですけれども、道路などは非常に良く整備されておりまして、山口市や萩市、徳山市などには、大体1時間ぐらいで行けるようなところにあります。

産業は、農林業が中心なんですけど、十種ヶ峰とか長門峡という観光地も持っておりますし、観光のりんご園のかなり大規模なものがあります。

(船方農場の現状)

船方農場は、いま酪農・乳牛が主なんですけれども、牛乳の生産過剰で乳価が低下しているんですね。これに加えて、国際化の中で、農産物の市場開放が言われていまして、そういう中で大変に危機感を抱いているわけです。

じゃ、それに対して、打開策としてどのように考えるかということで、みずからが価格形成ができるような生産システム、すなわち、今までとは異なる流通の形態を形成していこうということになったわけです。これは言いかえますと、直接消費者に対しての流通ということを考えておりますので、お互いに顔の見える関係、理解のし合える関係、信頼のし合える関係を消費と生産の間につくりたいと思っていました私のイメージともこの辺りでぴったり一致したわけです。

2. 「みるくたうん」開発構想がでてくる背景 ——組織農業の展開——

「みるくたうん」開発構想が出てくる背景には、この船方農場の昭和39年以来の歩みがあるわけです。

まず、昭和39年に、地元で農業の基盤はないけれど農業をどうしてもやりたい、とい

う若者が2人集まりまして、シクラメンを使いました協業を始めるんです。最初に協業の5年間がありまして、ここから生産の合理化、低コスト化、省力化を図るために、規模拡大をしてきます。その規模拡大の過程で、組織農業、組織生産を非常に重点を置いてやってきます。そして第3次5カ年計画ぐらいから、今度それに加えて、高付加価値生産ということで、第3次の中では、牛を飼っているとしてもふん尿が出ますので、堆肥の商品化と流通を始めております。さらに第4次5カ年計画にかけまして、需要創造型（農業）、消費者交流の推進を中心に置いて、経営を展開しております。

第4次5カ年計画のころから、新たな需要を創造しなければならない、そのためには、消費者のニーズを正確に知らなければならないだろうということで、消費者との直接の交流をと考え始めまして、第4次の中に交流の里開発研究会が設立されています。これが今回の「みるくたうん」開発の基本というか、基礎になったところでして、農場の長期展望計画にもずうっとかかわってきているものです。私が直接かかわり始めましたが、この交流の里開発研究会のあたり、山口のスイス村開発の構想などが出てきたあたりです。

こういう研究会を何度か重ねてきてまして、その中で船方の第5次5カ年計画が63年から始まります。そこでの話し合いの中で、まずこれからの時代がどのようになっていくだろうかということで、そこに四つ挙げました定住再生産社会、役割分担社会、価値別多様化社会、高度成熟社会、こういうような世の中が来るだろうということを展望しました。

で、その中で、これからの農村が担うべき役割として、生産の部分で再生産構造づくり、交流の中で新しい仲間づくり、流通の中で公開の分配方式の確立、生活ということで定住生活空間の創造、文化ということでふるさと

の伝統文化の継承と新しい農耕文化の創造、

以上の五つを挙げています。そしてこれからの農業に期待されるもの、そして農村が担うべき役割は、本当に広い分野に及んでいて、しかもかなり深いところまで突っ込んでいかなきゃいけないだろう、かなり重要な部分を占めてくるんだろうということを考えながら、大体の理念ができ上がってきたんです。

以上のような経過をうけて「みるくたうん」開発計画というのが出てきたんです。それがどのようにして起こってきたかというのを、具体的にその次の3のところで説明したいと思います。

3. 「みるくたうん」開発計画の推進経過

（「みるくたうん」開発計画の発端）

この開発計画の発端についてですが、昭和63年の12月に船方総合農場の方に、農政調査委員会による調査が入りまして、そのときに、せっかく東京からいらっしゃいますから、町内の人たちにも呼びかけて、ぜひお話を聞こうじゃないかということになりまして町内全域に案内を出しました。阿東町の中にも、いちおう阿東町活性化協議会というものがありましたので、その名簿をもとに町内全域、農家も、非農家もあわせて案内を出しまして、約30名ぐらいの出席をいただきました。そして地域活性化をテーマとして、地域の有志、農政調査委員会からいらした方たちとの意見交換会を行いました。

思った以上に人が集まりましたので、じゃ、せっくだから、これを研究会の形にして発展させていこうじゃないかということで、年が明けて、平成元年の1月に、「第1回の研究会を行いますからいらっしゃいませんか」と案内を出しました。そうしたら、20名ぐらいの方々に集まっていただきました。ここでいらっしゃらなかったのは、阿東町に観光りんご園がたくさんあるんですけれども、そのりんご園の関係の方たちがここで抜けてしまっています。そのほかの方たちは、大体

またいらしてくださいまして、ふるさとの経済の活性化についての研究会なんかの発起をどうするかという話し合いを始めました。

以後、大体月1回のペースでそれが進んでいきます。

2月に入りまして、研究会の名前をどうするか。運営機構をどのようにするか。ふるさとの活性化がずうっと言われていますから、そのふるさとの活性化という中で、この会がどういう位置で、どういう役割を果たすのかという会議を持ちました。

3月に第3回目、出席者も同じで、討議内容も第2回と大体似通ったことをやっています。というのは、名称も決まりませんし、運営形態をどうするかということもはっきり決まらずに、特にふるさと活性化という中で、この会に出席した人たちが、自分たち一人一人がどのぐらいのことができるのかというのが、全然見当もついていなかったんですね。そういう意味で、かなり時間がかかりました。

4月に、先ほどの船方農場の第5次5カ年計画の会議が持たれています。これは、今の研究会とはまた別の部分なんですけど、この中で阿東町内にドライブインの跡の施設を買収して、加工場とか直売所なんかをつくれないうだろうか、ふれあいセンター開発の可能性をどうするかということが出てきました。

それから、先ほどの5カ年計画の基本理念と21世紀の農村、農業モデル構想についての話し合いがなされていて、同じ4月の末ですけれども、第4回の研究会の発起人会が開かれています。

12月に初めて顔をそろえまして、第4回を経て、この時点でまだ研究会の発起人会です。だから、研究会をつくるかどうかということを、ずうっと4月まで話し合ってきたわけなんです。でも2回目以降は、脱落者は無しで来ておりますので、研究会をつくろうという方向でまあまあ盛り上がってはいたわけですね。

ここで、研究会の名称、運営機構なんかがはっきりでき上がりました、規約も大体のものができ上がりました。また、船方農場の方から、研究会に対して、既存施設買収による開発の事業展望について、こういうことがあるんだけど、どう思うかということが、ここで初めて出されてきています。

もう一つ、5月に正式発起をしようということが決まりましたので、会員の確認を行いまして、研究会とはまた別の流れが、5月にふれあいセンター開発起案者会の発足ができています。

開発目的から始まりまして日程まで、大体の試算も含めまして計画書を立案しました。

それに伴いまして、5月20日、福岡県に視察に出ています。これは福岡県の直方にびっくり市というのがありまして、明治屋産業という食肉の卸があるんですが、そこが毎週土曜、日曜に、自分のところの倉庫を開放しまして、お肉の安売り市をやっているんですね。そこに地元の農家の人たちなんですが、自分のところでできた野菜なんかを持ち込んで、売るという自由市ができ上がっていました、大変な活気だということで、それを見に行きました。

(研究会発足)

5月22日に第5回、やっと研究会が発足しまして、名前も、ふる里経済活性化クラブ「山いもの会」とつきました。

第5次5カ年計画の会議からの流れですけれども、ふれあいセンターの開発研究会で、5月23日に、初めて町とか地域の農協の方へ案内を出しまして、ふれあいセンター開発計画についての説明会を開いております。このときの案内者は、阿東町の町長と、阿東町内に五つの農協がありますので、その組合長さん、それから既存施設があります地域の営農の組合長さん、養殖の組合長さんなんかと開きまして、説明会を持ちました。このときに行政側からということで、町長なんかに、

こういう開発計画について言われましたことは、とりあえず地域の人たちの地域コンセンサスをとれということでした。

6月に2回、ふれあいセンター開発起案者会を開きまして、6月の末には、山いもの会も開いております。このあたりでは、山いもの会とふれあいセンター開発起案者会というのは大体一体となって、一つの目標を追うことができるようになりました。

7月に入りまして、ふれあいセンターと言っていたものを、グリーンステーションという名前にしようということで、グリーンステーション開発起案者会、そして7月22日に山いもの会が開かれています。ここではふるさと創生の1億円なんかの使い道を考えてみようじゃないかということと、今のグリーンステーションの開発進行状況についての話し合いがなされています。

7月24日に、グリーンステーションの開発起案者会が開かれまして、発起人会の設置、設立準備室の設置、開発用地、資金調達なんか、割と細かい事務的な話し合いがなされてきています。

8月に入りまして、グリーンステーションの第1回の発起人会を持ちまして、グリーンステーションを株式会社にしようということで、株式の募集方法をどうするか、定款なんかをどうするかということについて話し合ってきています。

(ポスト新農構に挙手)

8月に、グリーンステーションの発起人会と山いもの会と一緒にやったんですが、ここでポスト新農構の話が出てきてまして、この開発をポスト新農構に挙手できないだろうかという話し合いがなされました。で、いけるんじゃないかということで、当初この4月に予定しておりましたオープン時期を1年先に延ばしまして、株式についての縁故株主の募集なんかについての話し合いをしています。

9月に入って、9月1日で買収を進めてお

りました既存施設の買収交渉を中止いたしました。これは、金額で折り合いがつかなかったということで、開発場所をドライブインの跡地から、現在の船方農場の周辺に持ってきました。船方農場を核にして、その周辺を開発用地にしようということです。

また財団法人地域活性化センターのメンバーの方たちの視察が入りまして、そのときも、山いもの会なんかが出ていきまして、交流会を持っております。

9月19日に、船方の農場を中心に、こういう計画をやりますということで、阿東町への正式の計画説明が行われました。

(名称を「みるくたうん」に)

10月に入りまして、グリーンステーションという名前をみるくたうんと変えました。

実はこの時点で、既に阿東町自身が持っている阿東町活性化事業というのがあるんですが、その中の一部分に「みるくたうん」開発の構想を入れようという話になりました。そしてあとは、実際に株式会社みるくたうんの設立についてとか、実施事業・事業内容、事業費、実施年度なんかについての事務的な話し合いになっています。

10月に入りまして、大分県に視察に出ています。加工をやっている下郷農業協同組合というところですよ。そちらと、これは佐賀県のどんぐり村、これは観光牧場みたいな感じなんですけど、そこを見に行きました。

10月、事務的な会議が17日に持たれて、20、21日と今度は兵庫県に視察に出ています。視察内容は、今度の新しい事業の中に牛がおりますので、皮をどうにかしようということで、皮の加工だとか、縫製なんかを兵庫の方に見に行きました。神戸市立の農業公園、ここはワインのウインドーの加工場があって、外から加工しているところをガラス越しに見ることができます。そういうものと六甲山牧場、こちら、チーズをウインドーの加工場でつくっていらっしゃいますので、そ

れを見に行きました。

10月の末に、みるくたうんの発起人会が開かれまして、11月に入りまして、平成2年度の農業構造改善事業、いわゆるポスト新農構なんですけれども、これの新規指定・認定希望地区の審査会が県庁で行われています。これにつきましての町への報告を持ちまして、そして11月24日に「みるくたうん」の発起人会が開かれています。もうこのころになりますと、大体開発の推進機構ですとか、具体的な人事ですとか、開発資金なんかの問題が話し合われています。12月に入りましたら、来年度の4月オープンを目指しておりますので、来年度の経営計画なんかの会議に入りました。

1月20日、正式にみるくたうんの発起人会をやるぞということで、準備会を開きまして、株式会社みるくたうんの人事構想、株主の募集、来年度の計画について、話し合いがなされてきています。

そして、きのう、2月18日、株式会社みるくたうんの発起人会が船方農場の方で行われております。そして4月29日のみどりの日に創立総会を持ちまして、正式な会社の発足になります。

大体これが今までの主な流れなんです。山いもの会とのつき合いは、9月に既存施設の買収を断念した段階で、地理的な問題なんかもありまして、多少遠ざかっていたんですが、幸いなことにといいますか、阿東町自体の地域活性化事業の方と一緒にやることになりましたので、阿東町の実際に動くメンバーというか、中核のメンバーに山いもの会がまた浮上してまいりまして、また3月から、同じようにやっていけるんじゃないかと思っています。

4. みるくたうん開発計画の基本目標

で次は、実際に「みるくたうん」でどういうことをやるかということです。私たちの目

的は農業、農村の果たすべき役割を明らかにして、阿東町の町民全体と消費者が力を合わせて、農村地域の活性化を図ることですので、活動のテーマを、食と人と風土とに置きまして、「きらめく緑の仲間づくりをしよう」といたしました。そして開発の課題は六つの場づくりに分けました。良質の生産物を生産する生産の場、加工の中身が見えるように、これはイコール信頼ということにつながるんですが、ウインドー加工場をつくらうという加工の場、(消費者の)価値(観)別に対応していこうという流通の場、都市と農村の交流の場、住みよい生活の場、正しい情報の場の六つです。

この六つを合理的な経済性単位で組織化します(図-1)。生産の場は、現在あります生産法人船方総合農場と、それから船方農場と地域の農家の方たちとの協定営農会、その二つを生産の場と位置づけます。加工、流通情報の場は、今度発足します株式会社みるくたうんが持ちます。都市との交流の場は、今既存にあります株式会社グリーンヒル ATO を核にしまして、周辺のいろんな業種の方たちを、パートナーシップグループと名前をつけまして、このグループを中心に進めていこうということです。

生産の場づくりでは、21世紀の日本農業のモデル生産システムとして、「小規模複合大農場」を考えております。その確立を目指して、農場を核としまして、地域の家族経営の農家や集落営農組合と協力をしまして、土地、労力、資本、技術、設備の合理的活用を図って、畜産複合経営を基本とした共同事業の実施、新技術の導入、共同経理、経営コンサル、研修事業なんかを実施し、農産物のコストダウン、良質化、ブランド化に取り組んでいこうと考えております。担い手育成に関しては、非農家、高齢者の農業参加の場とシステムをつくっていこうと考えております。

加工の場づくりでは、私たちのつくった農

産物を主原料にして、私たちの手づくりによる特徴のある乳製品、肉製品、皮製品なんかの加工品づくりをやりようと思っています。加工場は、私たちの仕事ぶりを直接見ていただくために、消費者の方たちに、製造工程を見ていただけるようなウインドー加工場づくりを考えております。主なものは、牛乳やアイスクリームなんかになると思います。

流通の場づくりなんですが、流通の場づくりの核となりますのは、レジャーショッピングの場ということで、先ほど出てまいりました直方のびっくり市のような、地域の農家も参加できるし、消費者も参加できるという場をつくっていききたいと思っています。あとは、ニューメディアを使いまして、パソコンを使いました受注発送システムづくりを考えております。電話回線を使いまして、注文を受け、発送するということですね。それから「私がつくった食べ物です」という部分で、味覚のネットワークをつくっていききたいと思っています。これは、要するに消費者のファンの会と思っていたらいいと思います。

交流の場づくりでは、多くの消費者の皆さんに村を訪ねていただいて、自然と対話し、調和してもらおう、自然の中で過ごしてもらおうということで、「みるく砦」というものを考えております。ここには、図書館ですとか、美術館などを考えております。また農業生産の現場を開放して、見学、体験していただくような「わんぱく農場」づくり、次の世代を担う子供たちに、四季の味ですとか、かわいそうだなと思う気持ち、かわいいと思う心なんかを、体験を通して学んでもらおうという「モーモー学園」、などを消費者との共同で設立運営したいと考えております。それから、村の仲間と力を合わせて、ふれあいの里リフレッシュゾーンということで、自然の中を道草しながら、ちょっと小さな旅の感覚で歩いていただこうということで、「おいでませロード」づくりを考えております。

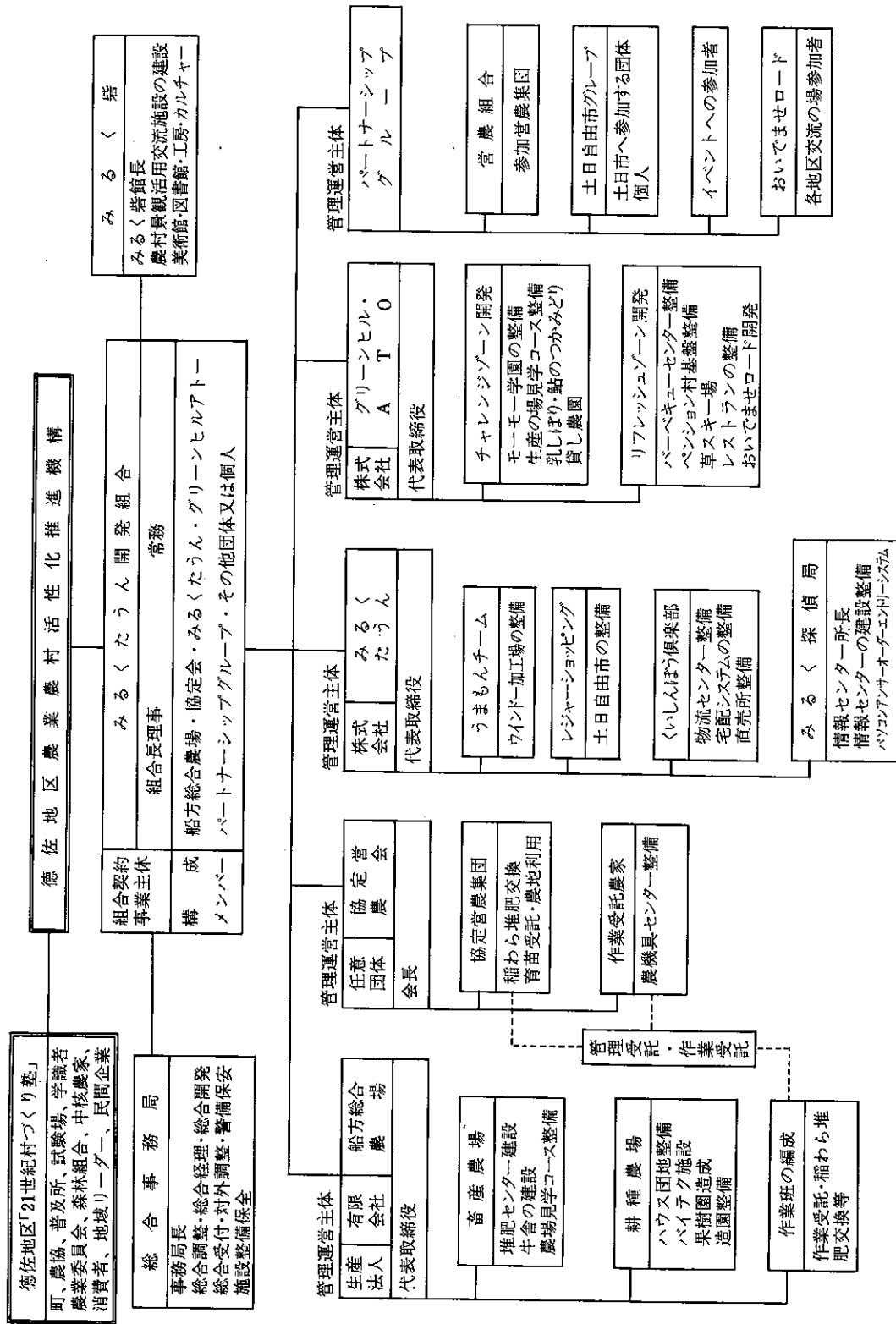


図-1 農業構造改善計画の推進組織構成と事業実施主体

生活の場に関しましては、みるくたうんのパートナーシップグループを中心にしまして、家族参加の行事を積極的に開催するイベント広場とか、カルチャーセンター、緑の図書館、ふるさと美術館等を考えております。伝統文化の継承と創造のすばらしさを心と体で感じただけのふれあいタウンづくりを目指しております。

最後に情報の場づくりですが、ふるさとの情報、農業経営、技術の提供を図ることのできる「みるく探偵局」を開局しまして、情報管理の高度化に対応するグリーンメディアシステムづくりを目指しております。グループのデータを集中処理、分析し、経理、技術、生活の情報ネットワークを形成すると同時に、消費者ニーズの収集により、消費者と連携のある村づくりを考えております。

また一方、村の中に対しまして、情報の発信基地としまして、情報紙の発行も考えて

おります。

大ざっぱですが、今までの流れとこれからの具体的な展望についてお話をさせていただきました。ありがとうございました。

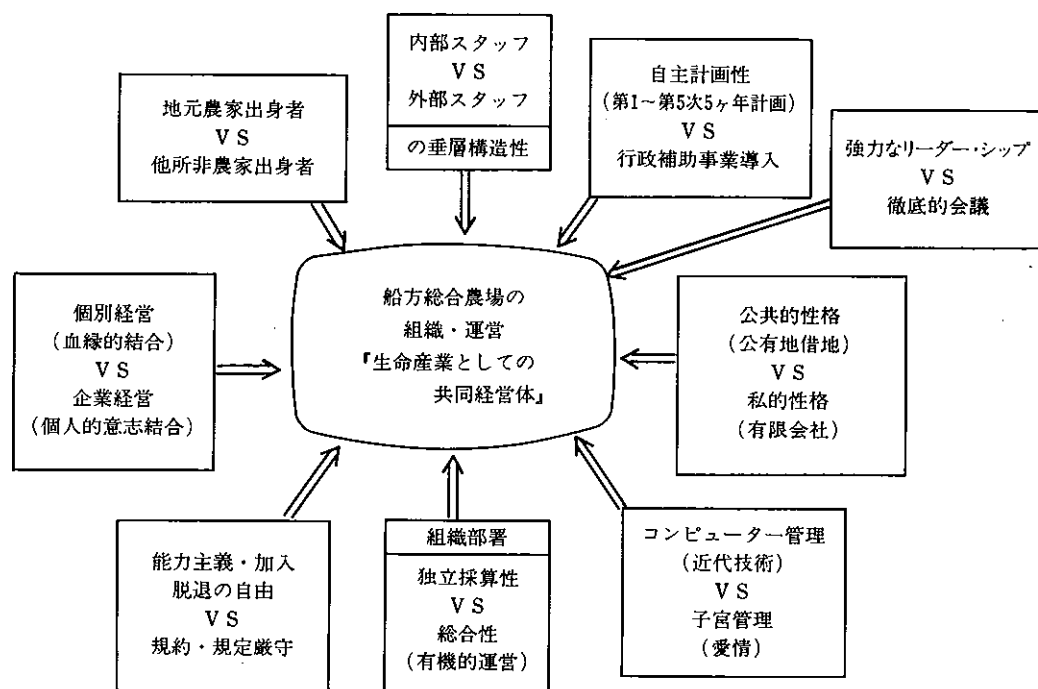
司会 どうもありがとうございました。

船方総合農場については農業研究センターの千田さんが調査に入っておられますので、ここで千田さんから補足説明をお願いしたいと思います。

千田 「みるくたうん」開発の推進母体である船方総合農場について、簡単にご説明させていただきます。

経営の展開は、先ほど説明されましたので、船方農場の組織の成り立ちについてみておきたいと思います。

補図-1 は広島県立大学の徳野助教授が整理され、分析されたもので農場の性格をよく表していると思います。



補図-1 船方総合農場組織・運営の緊張構造

船方農場は、町有地を低い地代で借地して、そこで会社形態の、酪農を中心とした生産を行っています。農業生産法人の資格を取っており、これまでの事業総額のうち4割ぐらいは国、県等の補助を受けています。社員は農家に限定されておらず、現在、社員は構成員も含めて25人ぐらいですが、その内、7、8人は非農家の方です。

このように各局面において、非常に緊張関係を持った組織構造であるがゆえに、各方面に活動的に経営展開してきたと考えられます。

こうした緊張構造を地域にまで広めたのが、タイトルにもあります地域複合生産システムであり、それをさらに都市、消費者との関係においてもつくっていかうというのが、この「みるくたうん」開発構想ではないかと思われます。

○ 事実関係みたいなものでちょっとお聞きしたいんです。

一つは、グリーンヒル ATO の主な株主、それと具体的にその社長さんとして活躍されている方の母体。中心出資者はどんな形になっているかというのをお聞きしたいのが1点です。

それからもう一つは、加工部門等の新しい事業を導入されて、しかも中身の見える加工の展示も含めて、ウインドー加工をやっていくというお話ですが、そういうものを担う、具体的な技術者の確保、養成の仕方について、どんな構想でおられるか、ちょっとお聞きしたいと思うんです。

いろいろと聞いてみますと、どうも技術者確保については非常に苦労されているようです。この構想の中では、特に新しい分野等については、企画とか、そういう従来の地域住民の形で余りやっておられない分野が出てくるような気がするんですが、その辺をどう考えておられるか、お聞きしたいと思います。

島添 グリーンヒル ATO の方ですが、こ

ちらは、4分の1ぐらいが消費者の方たちだと思います。あとは、マスコミ関係の方たちとか、もちろん地元の人たちも株主に入っているらしいです。ちょっと直接グリーンヒルの方にかかわっていませんので、具体的な数字がはっきりわかりません。

加工場について、一番問題になりましたのはお肉の加工なんですけれども、これに関しては、逆に技術者がおりましたので、肉の加工をしようと考えたんです。今回の研究会の方にも、発起人会にも入っておりますが、食肉の加工の技術を持った方がいらっします。

市乳とか、アイスクリーム、ヨーグルトなんかに関しては、設備がきちんとできれば、特殊な技術は必要ないというお話でした。

それとあと、加工場に関して、4月に大卒の子を1人、採用いたします。食品衛生管理者です。加工場でこの資格を持った方が必要です。山口女子大の家政学部、食物学科の学生で管理栄養士の方を1人、4月から新規採用いたします。

千田 グリーンヒル ATO の出資がどうなっているかということについてもう少し補足説明いたします。グリーンヒル ATO は株式会社組織ですが、農場とは別に設立しております。交流、宅配等をやっています。その代表者は従来農場にはかかわっていなかった方です。外部から来ていただいた方で運営されています。株主の方は、船方農場の社長が、半数以上の株を所有するという形をとっています。生産の場面と、加工、流通、営業にかかわる局面をきちんと仕分けるために、こうしたさまざまな形の組織をどんどんつくっていると思われます。

○ 流通面も、自分の体制内でやられるということで、ある意味では、農協にとって非常に脅威になると思うんですけれども、農協との摩擦というものがなかったのかどうか。

それから、なぜ農協を使わずに、新しい組

織をつくってやることにしたのか。そこら辺の事情を説明していただければと思います。

島添 今回のみるくたうんのことに関しましては、農協さんには、一応最初からいろんなお誘いはかけているんですけども、大体冷やややかで、無視されたと言う方がいいのかもしれない。そういう状況の中で、だんだんやるのが大きくなってきて、農協さんの方も無視し切れなくなってきたところで、すべてとは申しませんが、原材料にします農産物なんかは、農協さんを通してという話が出ております。

だから、決してみるくたうんが6番目の農協になろうという気持ちはさらさらございませんので、農協さんを通して、例えばお米ですか、何ですとか仕入れさせていただけたらなと思っています。

それから、この事業に関するといいますが、船方農場の周辺でやっておりますことに関して農協さんといろんなことはあったかとは思いますが、私がかかわりましたのがここ3年ぐらいですので、大体の雰囲気は無視しようと努めていらっしゃるのかな、ぐらいのことしかわかりませんでした。

司会 島添さんのご主人のほうからも補足していただけるのであれば、お願いいたします。

島添 (グリーンヒル ATO) 私は、グリーンヒル ATO の交流担当ということで、今回のことには直接タッチしていないものですから、今日は、一応聞き役とかばん持ちでついてまいりました。

先ほどの農協の問題でもそうですが、船方と周辺地域、農協も含めてのあり方は、今後

も何かと難しい部分が残るので、農協も一つの地域に五つもあつたりしますし、いろいろと大変なんじゃないかなと思っております。

○ 先ほどのお話ですと、この構想がポスト新農構の一環として位置づけられて、行われることになったというお話ですが、開発計画の基本目標で出されている計画と、ポスト新農構の全体の計画との関係ですか、どこまでがどういうぐあいに位置づけられていて、新農構全体の中での事業主体の中で、どういうぐあいにこれが位置づけられているのかというあたりをちょっと説明していただければと思うんです。ポスト新農構の中で、こういう事業がやられて、非常にユニークな事業だろうと思いますので、その点、ちょっと説明していただければと思います。

島添 山口のスイス村構想が出ましてから、ずうっと基本的な理念というか、この六つの場づくりみたいなものは変わってきていないんですけども、そういうものを始めていましたところへ、全くそれと同じ方向でというか、上に全くダブるような形で、ポスト新農構の方がおりてくださったというのが実際のところでした、ですから、私たちの感覚では、ポスト新農構に合わせてつくったものは全然ないわけです。

ただ、事業なんかの関係で、例えば株式会社だと事業主体になれないだとか、もちろん事業に乗らない部分なども出てきますから、その辺の細かい仕分けはしておりますけれども、大ざっぱに言いましてこの六つともが、ポスト新農構の上に何らかの形で乗っております。